



Title	条件表現の日中対照研究：翻訳の実際から
Author(s)	林，煒煌
Citation	大阪大学，2001，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42252
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 林 煒 煌

博士の専攻分野の名称 博 士 (言語文化学)

学 位 記 番 号 第 1 6 3 5 5 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 13 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

言語文化研究科言語文化学専攻

学 位 論 文 名 条件表現の日中対照研究－翻訳の実際から－

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 溝 邊 敬 一

(副査)
教 授 成 田 一 教 授 春 木 仁 孝 助 教 授 坂 内 千 里

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語と中国語の「条件表現」について、それぞれの接続様式である「と」「ば」「たら」「なら」と、「如果～、就～」“只要～、就～”等との形式上の相違と多義性のもたらす複雑な対応関係を詳細に考察・記述し、日中両言語の学習・翻訳の際の問題点を指摘し、さらにそれらの問題を解決するための具体的・実地的な選択要件を明示しようとしたものである。

現代日本語では一般的に「と」「ば」「たら」「なら」を条件表現の接続形式とする。構文論的には各形式とも条件節において述語文の文末について、さらに帰結節がその後に続くという形となっている。ところが、意味論的にはこの四つの表現形式は全く同様な意味を表すのではなく、それぞれの中心的な意味用法は異なっており、むしろ類義表現的な存在である。「と」「ば」「たら」「なら」などが用いられる日本語条件表現は大きく【条件的用法】と【非条件的用法】の二つに分けることができる。【条件的用法】には《仮定的条件用法》と《非仮定的条件用法》がある。さらに《仮定的条件用法》には〈假定条件〉〈確定条件〉〈反事実条件〉の三つの用法があって、《非仮定的条件用法》には〈一般条件〉〈反復・習慣〉〈連続〉〈発見〉〈同時〉〈きっかけ〉〈時〉など多数の意味関係を表す用法がある。また、【非条件的用法】には《主題提示・限定》《方式限定》《前後対比》等の用法がある。

中国語条件表現とは本論では「假定複文」（「假設複句」）と「条件複文」（「條件複句」）の両者を指す。“如果～、就～”と“只要～、就～”はその代表的な表現形式である。この二つの表現形式は前件と後件との間に存在する順接的な条件関係を表す。日本語条件表現の中の【条件的用法】もやはり順接的な条件関係を表す。したがって、この点において「と」「ば」「たら」「なら」が用いられる日本語条件表現と中国語条件表現、即ち「假定複文」「如果」及び「条件複文」「只要」との間に対応関係が認められる。

ところが、多義性を持つ「と」「ば」「たら」「なら」の各形式が用いられる日本語条件表現を中国語に翻訳する際、それに対応する中国語表現は必ずしも「假定複文」「如果」及び「条件複文」「只要」だけではないという問題点がある。翻訳の実際から見れば、日本語の条件接続形式「と」「ば」「たら」「なら」に対応できる中国語表現としては“如果”“只要”“時”“後”“一～、就～”などが挙げられる。第一部の序論では、「と」「ば」「たら」「なら」が用いられる日本語条件表現を中国語に翻訳する際の問題点を指摘し、そして、問題を解決するのに極めて重要である日本語条件表現と中国語条件表現それぞれの枠組を規定した。

順接的な条件関係を表す中国語表現は「假定複文」「如果」形式と「条件複文」「只要」形式の二つに分化している。

そのため、「と」「ば」「たら」「なら」が用いられる日本語条件表現を中国語に翻訳する際、“如果”形式に対応させるか、それとも“只要”形式に対応させるか、という問題が起こる。第三章では“如果”と“只要”の中心用法及びそれぞれの語用論的用法を把握した上で、日本語条件表現の枠組と対照し、両者の使い分け基準を明確にした。

また、「と」「ば」「たら」「なら」などが用いられる条件表現には《非仮定的条件用法》がある。特に、「と」形式と「たら」形式には過去一回性の事実を表す用法があることがよく知られている。このような用法に常用される「と」形式と「たら」形式は「条件的」関係というよりもむしろ、「時間的」関係を表している。そして、このような「時間的」関係を表す「と」「たら」の文表現を中国語に翻訳する場合、よく“時”“後”などの中国語表現を以って対応するのである。

“時”“後”は品詞論的にはそれぞれ「時間（名）詞」「方位（名）詞」に属している。しかし、中国語の複文においては、「時間的狀況・条件」を表すこともできる。複文において、主節と従属節の間に存在する「時間的条件」をも広義的な「条件関係」と認めるならば、当然、“時”“後”を条件表現の構成要件の一種として扱わなければならない。第四章では日本語の条件表現形式と“時”“後”との対応関係、並びにこの二者の間に存在する選択制限、即ち“時”と“後”の使い分けを分析した。

ところで、日本語条件表現と中国語条件表現との間には構造的な相違が存在している。日本語条件表現は「と」「ば」「たら」「なら」といった条件接続形式が条件節の述語文の文末に付いて、その後に帰結節が続くという構文法に対して、典型的な中国語条件表現は“如果”“只要”などの表現形式が条件節の文頭にきて、その後に述語文が続き、さらに帰結節のなかには副詞“就”が用いられて、条件節で述べられる〈假定〉または〈条件〉を受けて結論を述べるという構文法を成している。つまり、典型的な中国語条件表現形式は、条件節の文頭に来る接続詞（“連接詞”）——“如果”“只要”など——と、帰結節の文中に来る副詞“就”との組み合わせから成る。日本語条件表現の帰結節には副詞“就”のような表現がないため、日本語母語話者の中国語学習者にとって“就”の使いこなしは中国語条件表現習得の課題の一つである。しかし、「假定複文」「条件複文」のすべてが必ず“如果～、就～”と“只要～、就～”という典型的な型式を取っているわけではない。第五章では帰結節の構成要件である“就”の使用条件および“就”が省略される構文的条件を明確にした。とりわけ、主節の条件と従属節の結果との間に「必然性」を備えているか否かは“就”の使用如何を考えるには重要である。そして、副詞“就”の本質を明らかにした上で、“就”と関わり深い“一～、就～”形式をも分析した。“一～、就～”形式には「継起的関係」及び「条件的関係」を表すという二通りの意味用法がある。「継起的関係」を表す“一～、就～”形式は日本語の「と」形式条件文と、もっとも多くの対応関係が見られる。そして「条件的関係」を表す“一～、就～”形式は「緊縮文」（“緊縮句”）の形式の一種であって、「条件複文」「只要」形式と深い関わりがあることを明らかにした。

また、中国語条件表現の習得に際して、日本語母語話者にとってもう一つ重要な課題は助動詞“會”である。“如果～、就～”“只要～、就～”を表現形式とする中国語条件表現の帰結節のなかに、助動詞“會”と共起する例は少なくない。助動詞“會”は中国語条件表現において一般的に帰結節の構成要件とは見なされてはいない。しかし助動詞“會”を欠く中国語条件表現が非文や不自然文となってしまうほど、中国語条件表現において助動詞“會”の役割は大きい。基本的に、ある条件のもとで事柄の実現する可能性の有無を論じる「命題認識型条件表現」や、自然界の常態、法則性のある現象、習慣・慣行など「傾向」を表す場合、帰結節に副詞“就”のほかに可能性を表す助動詞“會”をも用いる必要がある。これに対して、「発話伝達型条件表現」の場合は、帰結節に助動詞“會”を用いる必要はない。また後件の述語が状態性である場合、統語的な理由で助動詞“會”が用いられる必要がないし、帰結節の中に、“可以”“能”といった可能助動詞があれば、やはり可能助動詞の“會”が使えなくなるのである。第六章では中国語条件表現の帰結節における助動詞“會”の使用・不使用に関する構文的条件を分析した。

以上、日本語条件表現と対照した上で、日本語条件表現との間に対応関係があると見られる中国語条件表現及びその他の関連表現の構成要件を第二部で検討した。そして、第二部の成果に基づいて、第三部では個別的に「と」「ば」「たら」「なら」の各形式を捉えて、具体的にそれぞれの形式と中国語条件表現及びその他の関連表現との対応関係を検討した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代日本語と中国語の「条件表現」について、それぞれの接続形式である「ト」「バ」「タラ」「ナラ」と、「如果～、就～」「只要～、就～」等との形式上の相違と多義性のもたらす複雑な対応関係を詳細に考察・記述したものである。本文は152頁（400字詰456枚）からなり、全体は3部で構成されている。

第一部（序論）は、日本語条件表現を中国語に翻訳するさいの問題点を指摘し、それら問題を解決するための両言語における条件表現の枠組みを規定している。日本語「条件表現」の中心は、条件節に表される事柄が「仮定的」で、帰結節への論理展開が「順接」である表現で、中国語「条件表現」の代表的な表現形式は「如果～、就～」（仮定文）と「只要～、就～」（条件文）である。これらは前件と後件の間に「順接」的な条件関係が存在することを示し、この点で日中両言語の条件表現形式は対応関係にある。

第二部は、本論文の理論的考察の中核で、日本文の条件表現を詳細に分類し、その上で中国語条件表現との対応関係を考察、使い分け基準を明示している。まず「条件節」では、日本語条件文と中国語条件複文の対応が、仮定性・条件性にわけて検討され、それぞれの対照関係が論証されている。また、「時間的な継起関係」を表す「ト」「タラ」等を広義の条件文ととらえ、中国語の「時」「後」に対応することを明らかにしている。

「帰結節」については、中国語の帰結節に見られる副詞「就」と助動詞「會」が考察される。これらは日本語条件表現に対応形式が存在しないため、学習あるいは翻訳においてしばしば困難を生じる要因となっているが、筆者は、とりわけ日本語母語話者の中国語学習者に多く見られる誤用例の分析に基づき、これら要件の適用条件を明らかにしている。

第三部は、日中両条件表現の対応関係を、豊富な例文を駆使して検討して、第二部の理論編に対して、具体的な事例集となっている。

このように本論文は、中国語学習者、日本語学習者双方にとって極めて学習困難な言語表現である日本語の「条件表現」について、論者自ら中国語を母語とする日本語学習者の経験に立って、詳細かつ総合的に考察、対照化を目指し、先行研究を十分に踏まえた意欲的な業績である。長年の精力的な収集による280点に及ぶ豊富な例文は、筆者の論旨の有力な説得材料となっている。さらに、それら例文の比較対照分析はよく行き届いており、今後のこの分野の研究に対する貴重な貢献と評価できる。

ただ、日中両言語の「条件表現」の対照化を急ぐあまり、語彙論と文構造の区分があいまいな点、また、日本語の接続助詞と中国語の接続詞との対照に焦点をしばったため、文全体への目配りがややおろそかになった。今後、言語学、とりわけ言葉へのより精密な関心を深めることが望まれる。しかし、これらの問題点にもかかわらず、本論文の成果は十分に評価できるものであり、本審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定した。